



GLOCAL MISSION

外国籍の患者への医療・看護が 最先端の台湾から学ぶ！ プロジェクト

附属病院に勤める看護師の方や、大学院生にインタビューをすることで他言語の外国人患者への言語配慮について、文化や宗教の違いによる個別性への対応方法、台湾人患者への看護と外国人患者への看護の違いを学ぶことができた。

台湾は台湾語、中国語、英語など様々な言語が飛び交う地域であり、それに合わせて看護師も勉強をしている姿勢が見られた。島根では多言語での対応ができる看護師が多くはないため、多国籍患者に同等な対応ができるようにするため、努力することが必要であると考えられた。

島根でも在日外国人が増加しているため、多国籍に適應する看護を提供できるようにしなければならないと感じた。

団体名

看護栄養学部 看護学科4年

採択枠

海外活動枠

渡航国

台湾

訪問先

Taipei Medical
University

渡航時期

11月に3日間

おしえて？このプロジェクトで得たこと

台湾はさまざまな言語が飛び交う地域であった。患者やその家族のニーズに合わせた適切なケアを提供するためには、医療者と患者や家族との円滑なコミュニケーションをとる必要となる。今回インタビューさせていただいた看護師の方は、患者と関わるなかで自主的に言語を学んでおられ、患者と同じ言語で関わろうとされる姿勢が感じられた。また、国によって医療に対する考えや、宗教によって受けられないケアなどが存在することが理解できた。台湾の病院では、このような患者に対しても、ひとりひとり個別の対応が取られていた。

日本も外国人患者は増加傾向にあり、患者ひとりひとりに合わせた適切なケアを提供することが重要となる。しかし、言語の違いによって患者の詳しい主訴や症状が伝わりにくいことが考えられる。看護師は、言語的なコミュニケーションだけでなく、ジェスチャーや患者の表情から思いを汲み取ったり、翻訳アプリや筆記具などを用いて患者と関わっていくことが重要であると推測する。私たちも患者の思いに寄り添ったケアを提供できるような関わりをしていきたいと考えている。

聞かせて？これからのミッション

TO BE A グローカル Nurse!

島根県の病院では外国人患者に対する十分な設備が整っていない。そのため、まずはブラジル人を中心とした外国人患者が日本人患者と変わらない条件で医療を受けることができるように環境を整えていく必要がある。このような環境設備を実現するためには、台湾の病院で実施されているように、多言語患者や異なった文化を持つ患者に対応できるようにすること、日本語を話すことができない患者の立場に立ち気持ちを考慮しながら看護を行うことが重要である。また、看護師自身もグローバルに対する意識を高め簡単な英語からでも対応できるようになることで外国人患者が気軽に医療や看護を受けることができるようになるのではないだろうか。

活動の軌跡

外国籍の患者への医療・看護が最先端の台湾から学ぶ！プロジェクト

【大学院生Aさんへインタビュー①】

公衆衛生の学士を取得して2年間働いた後に、看護に興味を持ち看護の学士を取得し、看護師として外来で勤務している大学院生にインタビューをさせて頂いた。

医学の専門用語は英語由来のものが多いため、台湾では、大学の授業での先生のpowerpointは必ず英語と中国語の表記があり、必ず英語での表記も覚える必要がある。また、院内カルテも薬や病名などは英語で表記すること。ほとんどの看護師はシンプルな英語は話せる。近年、フィリピン人やインドネシア人が介護士として病院内で一緒に働いている。彼女らは、中国語が堪能ではないため、介護士とのやりとりも英語で会話や指示をしている。

医師は英語が堪能なため、外国人患者への詳細な説明は、医師が英語で説明をしている。このことから、台湾では、大学から英語を使って学んでいたり、英語で患者や外国人介護士との意思疎通をしていたり、英語を身近に活用していることが分かった。Aさんも、言語による問題は特になく、と話されていた。日本も大学から、英語の授業以外でも英語を授業内で使用して医学英語に慣れていければ良いのではないかと感じた。

更に、外国人診療センターについても教えて頂いた。診療センターでは、病院が雇った通訳が外来だけではなく病棟にも毎日滞在しているとのこと。また、病棟には、料金は高くなるが、外国人VIPルームがあり、英語が堪能な看護師が常駐していた。日本では在日外国人が増加している中、外国人診療センターのような医療施設が増えれば、外国人患者は安心安全に医療が受けれるのではないかと感じた。



【病棟看護師Bさんへのインタビュー】

アメリカの大学でデザインの学士を取得後に、看護の学士を取得して、現在は子育ても終わって看護師として働きながら大学院に通っているBさんにインタビューをさせて頂いた。

台湾では、広東語、台湾語、ハッカ語などの言語が使われている。現在は、広東語がメインの言語だが、元々は台湾語を話す人が多かった。今は台湾語を話せない台湾人が多いが、台湾語だけ話す人もいる。院内に台湾語の通訳はいない。その為、台湾語だけを話す患者との意思疎通が難しい為、Bさんは自主的に台湾語を勉強しているようだ。難しい話は、台湾語が流暢な患者に教えてもらったりしているとのこと。日本では日本語だけで生活しているが、台湾では子どもの頃から他言語が身近にあって、台湾内でも言葉が通じないことがあるという認識と経験がある為、言葉が通じない相手がいることも当たり前の環境であり、その環境がどうにか相手に理解してもらおうという気持ちや行動に繋がっているのではないかと感じた。日本でも、言葉が通じない人がいることが特別なことではないという認識を普段の生活から持つことが必要ではないかと感じた。

外国人患者には香港人が多く、香港人も広東語を話すので言語の違いによる問題はほとんどないとのこと。台湾人と香港人は文化や宗教や習慣が似ているので、文化や宗教による問題もほとんどないとのこと。外国人介護士とのやりとりも、英語が苦手な看護師もシンプルな英語を使って問題なく連携が取れているとのこと。やはり、育った環境で他言語の存在の認識や意思疎通を経験していることで、職場での環境にも良い影響を受けることができているのではないかと感じた。

Bさんにインタビューをすることより、アメリカに留学をして英語を勉強し、台湾では患者の為に台湾語を自主的に勉強し、また現在は大学院にも通っているBさんのパワフルさや前向きな考えに刺激を受けた。自分も頑張ろうという気持ちにもなれたし、日本でもこんなパワフルな看護師が増えたらいいな、と羨しく感じた。



【スタッフの癒しの空間を見学】

病院内には、病棟から離れたところにスタッフのみが利用できる部屋があった。そこには、社員証をかざすとお菓子や飲み物が無料で出てくる自販機があった。看護師さんによると、お昼休憩の際に訪問してつらいとのこと。室内から屋上へ出られるような設計になっており、見晴らしの良い市内を眺めることができた。また、ワーキングスペースもあったためリラックスしながら、勉強ができる仕組みになっていた。看護師のQOL向上のために適しているサービスであると考えた。

【大学院生ヘインタビュー②】

台湾医学大学の大学院生のCさんDさん2名にインタビューをさせて頂いた。

台湾生まれの台湾人の方と、インドネシア出身でのインドネシア人の方であった。インドネシアでは看護学校で講師をされている。2人共、英語が堪能である。Cさんは、以前、修士の取得の為に台湾に滞在し、今回は博士号を取得する為に、再度、台湾医学大学の大学院生として台湾に滞在されている。



以前、修士の取得の為に台湾に滞在中、台湾の病院で手術をした経験があった。Cさんが入院中、中国語がまだうまく話せなかったCさんに台湾の看護師は、とても親身に対応してくれたと言う。英語が苦手な看護師は、単語を使ったり、絵で書いたり、どうにかCさんが理解できるように対応してくれたと言う。Cさんは慣れない土地で1人での入院生活に不安があったが、看護師がいつも笑顔で親切に対応してくれたことで、入院生活の不安がなくなっていくように感じた。その経験から、Cさんは台湾が大好きになり、また、台湾に戻って学びたいと思ったそうだ。このことから、Cさんは私達にアドバイスをくださった。「日本での外国人患者は、大きく感情を表出したり、強い要望があったりして、看護師は困ることがあるかもしれません。だけど、まず、看護師が患者にどういった態度や対応をしたかで、患者の態度が変わります。『自分が外国に住んで、1人で病院にいななければならないとしたら、自分は思う？』って考えてみたらいい。看護師が患者に対して親身になっていることを患者が感じれば、患者の態度が変わり、外国人患者との問題は無くなっていくわよ。」ということだった。

これを聞いて、「確かにそうだな」と思い、今後、看護師として勤務し、自分が外国人患者を受け持った時に、Cさんの言葉を思い出して患者に看護していくと思った。また、外国人患者への対応や看護に困っている看護師にも伝えていくことができた。実際には、『自分が患者の立場だったらどう思うか』、ということは日本人の患者への看護にも言えることだが、外国人患者だとなぜ違う人間だと感じてしまいがちで、『自分が患者の立場だったらどう思うか』、ということが頭から外れてしまいがちなものかもしれないが、外国人患者への看護の場合も、日本人患者への看護と同じで、患者の気持ちになって考えて看護をしていくことが必要だとCさんのお話から気づくことができた。

【衛生福利部雙和醫院の救急看護師Eさんヘインタビュー】

衛生福利部雙和醫院の救命救急センターで働く看護師のEさんヘインタビューさせて頂いた。



現在の台湾のスタッフ間の連携における医療の問題としては、インドネシア人の介護スタッフが多いため、英語でのコミュニケーションを図ることが困難な人が多い。以前はフィリピン人が多かったため問題はなかったとのことである。そのため、詳しい内容を話すことはできないが形態のアプリを使ってコミュニケーションをとっていることが現状である。また、インドネシア人は病室に貼ってあるQRコードを読み取って、観察方法やケア方法を見れるよう工夫されている。それでも理解できない場合には、ビデオを見て理解できるような体制をとっている。そのため、多言語を話すことができるスタッフを優先的に雇用するようになっていくとのことである。多言語が飛び交う職場であるため、仕事に話せない言語の勉強をしているそうである。

文化による看護の違いについても話を聞いた。まず、台湾人の特徴としては、病気になるかすぐに受診する傾向にあるとのことである。この話をもとに病院内を見てみると、外来には多くの外来患者の姿がみられた。混雑緩和のために、大病院ではアプリで問診を行っている。また、胃腸造設などのボディイメージの変容を受容したい傾向であるため、胃腸造設を断る患者家族が多い。理由としては、老人に苦しい思いをさせたくない人、誤嚥のリスクがあっても好きなものを食べさせてあげたいと思う人が多いことである。患者や家族にとってはこの選択がジレンマとなることもある。

産婦人科での日本の病院との違いは、母子同室は12時間が24時間か選択することができることや、夫も泊まれるファミリールームがあること、また病院食ではなく褥婦専用の食事配達サービスがあるため入院中でも自分が選択したものを食べることができる。しかし、デメリットとしては病院食ではないため看護師が介入できず、管理できない事が問題である。

台湾でも、出生数が減少し初産婦の年齢が上昇しているため日本も台湾も高齢出産に対する支援や体制を整えることが重要であると考えた。